

H. v. Kleist のベルリント刊新聞

松 沢 芳 郎

I B A 発刊時

Arnim が1810年9月3日に Kassel にいる Grimm 兄弟に宛てた書簡 (L396 a) に「K は……現在夕刊紙を Hitzig 書店で発行」と伝えてある。

K は10月1日からの B A の発刊の広告を、9月25日の Voß 新聞に編集者や発行者の名も のせずにのせ (L397 a)、(これはまた同じ文面で Spener 新聞にも10月4日にのせられた) そして新たに9月29日に【おそらく Hitzig の手になる】その「年度末に事業のくわしい計画」なるものが同じ Voß 新聞に載せられた (L397 b)。これは更に10月1日の「Berliner Intelligenzblatt」と、10月6日の Spener 新聞にのった。こうした他の新聞にのせて宣伝する以外に特に Berlin の街頭でビラで広告された。勿論その場合の広告の趣旨はもはや不明だが、新聞広告と似た文面と考えてよいだろう。そして広告方法として興味あるのは新聞広告の中にあるように第1号が無料で配布されたことであり、こうしたことが読者獲得の方法としてはセンセーショナルであった。

こうして10月1日に4ページ折帳の新聞が号外2ページと共に発刊された。この夕刊第1号の4頁目の最後に Voß 新聞に載った広告と同じような文 (字句が前後いれかわった文) が「本屋への発送は、しかしただ月刊雑誌の取扱いの場合ですが、当地の本屋 J. E. Hitzig が引受けました」(CHV全集, II, S. 452) とつけ加えられて載った。そしてこのつけ加えた一行によって発行者の名は知られた訳だが、まだ編集者【主としてK】の名は一般の読者には公けにされていない。

「Archiv f. Literatur, Kunst u. Politik」(Hamburg, 1810.10.28),

「Nordische Miscellen」(Hamburg, 1810.10.20),

「Zeitung f. d. eleg. Welt」(Leipzig, 1810.10.15),

「Morgenblatt」(1810.10.25) といった他の新聞雑誌にもその後 B A の発刊のことがそれぞれ伝えられている。

B A のおそらく爆発的な売行のため販売面で一週間后には発売場所がもう狭すぎて変更を余儀なくされ、その変更などを決めた公示が「An das Publikum」という題で、B A (1810.10.5), 「Berliner Intelligenzblatt」(1810.10.8), Voß 新聞, Spener 新聞 (1810.10.9) にのせられた。

「諸生に

B A の配布について我々はこれまで明らかとなった読者の希望全てを満足させるために次の企画が行われました。

1) これまでの事務所が、人々が意外に殺到すると狭すぎる事が判ったので、今月8日月曜から上記の夕刊新聞はもはやカトリック教会裏でなく、Kralowsky 氏の貸出図書館、Jägerstraße 25番地1階

で発行されます。出版される時刻は今後の新聞もこれまでどおり5時～6時であります。それに対して以前発行していた場所は(即ち Kralowsky 氏宅では)午前8時～10時、午後は2時～6時です。同じくこの時刻にも予約が受け付けられます。

2) 夕刊紙を毎夕家へ送り届けるのを希望される方は、予約なさった限り、お好みの場所へ予約受領証の提示で Fischerstraße 13番地の Buchalsky 氏に申出て下されば、3ヶ月間4 Groschen の配達料で引受けます。

3) 郵便局の近くにお住まいの読者の方々は夕刊新聞を郵便局からも毎夕配達させられます。郵便局員とその件で協定なされば。

4) 翌日以降では、町から遠い方々にも、配達場所を指示なさって予約なされれば新聞を毎夕受取ることができます。

5) 当地の郵便局が王国の全郵便局に第1号の献呈版を、予約をすすめる要請と共に託すという労をとりましたので、市外の予約者は、それぞれ最寄の郵便局をお知らせ下さればよいでしょう。

さらに第4号(10月4日付)の最後のページに指示されていますが、読者の皆さんはこの新聞が Berlin から報道するものはニュースと真実のみであると御納得下さい。

二仲、このような多くの需要でとうとうまた気付かれるのは、次のようなことが自ら判ることでしょう。今でも或いはあとでも第1・4半期18 Gr. で予約する人はどなたでも10月1日からこれまで発行された号全部を追加して入手できます。

Berlin, 1810. 10.5 夕刊紙の編集者」

こうした初期には新聞の好評もKの着想してのせた警察記事にあり、「文学的観点で現在夕刊紙はいくらか評判がよろしいのです、その紙面の警察報告のためです」(L405)とあるように、「すでに相当の金をもうけ」(L406) たらしくBAはうまくゆくようにみえた。

II BAに関係するあれこれ

(2) Brentano との衝突の件

当時開かれていたベルリン美術展覧会についてBAでは Ludolf Beckedorff が「Kunst-Ausstellung」なる題で長文の論文(10月6日～19日の間8回にわたっている)を発表した。その頃に Brentano は10月14日以降の「BA」のために準備しておそらく10月6日から11日までの間に「Vom großen Kurfürsten……」(L409)なるすぐれた詩を書いている。しかし12号にのった Brentano の「Empfindungen vor Friedrichs Seelandschaft」なる論文は、Arnim と Brentano がベルリン美術展覧会に出品されていた作品を批評して書いた合作の論文「Verschiedene Empfindungen vor einer Seelandschaft von Friedrich, worauf ein Kapuziner」をBAに寄稿したのを Kleist が筆を加えて思いきって縮めて、しかも Brentano の頭字「c. b.」をつけて発表したものだったので、Brentano は激怒して上記の詩を推敲し完成するのをやめて手許にとどめたのだった。

このBA12号発表の「Empfindungen……」に対する Brentano の怒りを静めるべくKは Arnim 宛に14日、とりなしてくれるよう手紙を書き(B176)、更にBA19号に釈明をのせて弁明し、Brentano にあやまっている。この件で結局 Brentano は同人としての熱意を欠くことになったのだろう。

しかし Brentano はその後(1810.11.2) Berlin から Grimm 兄弟宛に、A. Müller と

Kが「Hitzigによってベルリント刊紙を出しています、もし我々に何かがおければ新聞にそれを出しましょう、非常な退屈さと、Müller 流の気品、そして多くのいい逸話がある中に入ります」(L420 a)と書いているから、ある程度 Brentano もKの謝罪を了としたのだろう。また Arnim も「私は依然として夕刊紙の熱心な協力者です」(L420 b)と書いている。

(5) Iffland についての関係

Iffland は Berlin の舞台監督でありながら余りにも客演旅行が多かった。その点はベルリント子には嫌われていた。それでたまたま1810年9月30日に Iffland の Berlin 帰郷があった。Käthchen をめぐっての前回までのいきさつの後でもあり、もともと Iffland を心よく思っていないので、この時もKは Iffland が Berlin でいくらか客演するだろうという風刺的紹介批評をBAにのせようと思ったが、これは検閲で没になり、あてこすった頌歌「わが友 Iffland に——その1810年9月30日の Berlin 帰郷に際して」が検閲を不思議なことに通過してBA3号にのった。

また Saurin のフランス喜劇「Moeurs du Temps」(1760)を Julius v. Voß が「Ton des Tages」(1806)と翻案したものが、1810年10月2日に Berlin で上演された。その紹介批評としてKが書いた「10月2日：Voß の喜劇 Ton des Tages」がBA4号で Theater の項目でのせられた。勿論これも Iffland 攻撃であるが、皮肉たっぷりであり「Iffland は事実非常に驚くべき方法で感情の殆んど凡ゆる状態や心からの動きをそれで表現している」といったような調子である。この文の署名が「xy」だったので、C. Munchler の短嘲詩「劇評家 xy氏に」となったのである。

これについては Hamburg の Nordische Miscellen (1810.10.21)に「この夕刊紙の最初の号にある劇場批評の中には劇場監督 Iffland 個人に対する愚弄の気持があるのは否定できません；そして一般に言われているように、H. v. Kleist 氏の Iffland に対する個人的な嫌悪にその理由があるのでして、それには次に明らかにしますように [Käthchen をめぐるKと Iffland とのいきさつから] Iffland が全く責任がないということもありません」(L415)とある。

IV Kraus 論 争

Kはしばしば「Krause」と書くが、ここに Christian Jakob Kraus (1753~1807)なる人物がいた。彼は国家経済学者で Königsberg 大学教授で A. Smith の信奉者であった。1780年以来 Königsberg 大学で実践哲学と財政学を講じ、A. Smith の自由経済学をドイツに広め、プロシヤにおける国家経済学的立法に影響を及ぼした。彼の著作は H. v. Auerswald が中心になって1808年には「Staatswirtschaft」4巻が出され、同年更に「Vermischte Schriften」が順次刊行されていた。他のところと違ってKの Berlin グループはこの Kraus の意見に反対する立場を取っていた。

この Kraus に関して A. Müller が中立的立場の「Über Christian Jakob Kraus」と題してBA11号に論文を載せた。しかしこれは Berlin, Königsberg の政府指導者を憤慨させ、それでBAに投稿がなされてきた。そこでKはBA16号に「告示」として「二つの論文、一つは C. J. Kraus (今月14日付)夕刊紙11号の論文への返答、もう一つは (今月17日我々に送られてきた) Antikritik という題ですが、……この新聞の紙面が許せば、すぐ載せられま

す、その際我々はその寄稿文を出して下さる無名の同人の方々に、この新聞の経営状態を顧慮して下さるようお願いいたします、そしてどうか論文を分けねばならぬ苦境を勘弁して下さい。編集部」をのせ、反論を載せていくことにした。

まずBA 19, 20, 21号に3回に分けて J. G. Hoffmann の「Christian Jakob Kraus」をのせ、ついでBA 24号に Nicolovius の「Antikritik」をのせた。この二つの論文で Berlin の Kraus-Smith 派が発言を求めた訳である。政府指導層への刺戟はすくさまBAを脅やかし容易ならぬものにならざるを得なかった。人々はそうした攻撃的な批判に形式的に責任を誰がとらねばならぬかを知りたがった。それで Voß 新聞の告示と共にKは今やBA 19号に多人数の匿名の社から抜け出て責任ある出版者として始めて自分の名を出している。

Arnim も Müller と同じように Kraus の功績に疑念をさしはさんでいる側であったが、BA 27号に「Noch ein Wort der Billigkeit über Christ. Jakob Kraus」をのせて、その中に「……しばしば聞かれた所見だが、夕刊紙の読者がなぜ自分らはそれほど沢山ある男[C. J. Kraus]については今なお聞くべきなのか、この男の書いた物は理論がどんどん先に進んで現実の観察が種々報道されたあとでやっとやって来るのだが、と苦情が、出ていました。この所見の中に実に不確かなことがあります……」とも述べ、11月〔はじめ〕にKの編集上の補足を指摘する意図で手紙をKに書いている(B177b)。

それで今や Müller の反対者は盲目的にこの Arnim の論文に対して向くこととなり、J. G. Hoffmann が再びBA 34号に「Kurze Antwort auf den L. A. v. A. unterzeichneten Aufsatz in Nr. 27 der Abendblätter」をのせる。この中では Arnim は愚人と罵られ、Arnim が争に介入するのはさしでがましいとさえいわれている。

益々憤慨した Arnim がその結果、「さしでがましい人々の中傷がすでに多くの面で傷けてしまった尊敬すべき博識ある友人」(即ち A. Müller) と「周知のようにこの Feuerbrände のために要塞禁固の宣告された Feuerbrände の著者(即ち F. v. Cölln)」との比較に憤慨して「Wer ist berufen?」という論文をBA 36号にのせる。

Kはその争いをやめさせようとして「Erklärung」という題でBA 46号に「確かに筆者は C. J. Kraus や A. Smith の学説の原則をプロシヤの国家行政にあてはめるのが合目的かそうでないかという問題に味方しましたが、この論題はどの面からみても非常に重要で、この問題がこの夕刊に筆者がそのことを取上げた学術上の議論に成行きを任せるべきです。それでも筆者は読者に、このことに持つ筆者の関心を確かに非常に尊敬に値する Königsberg 出身の政治家の手になる次の論文を示します。この政治家は彼の友人、故 C. J. Kraus のことを論駁(11号)から守るのを使命と感じていました」と断り書をかいて Johann George Scheffer の「Auch etwas über C. J. Kraus auf die andere Manier」なる論文をのせる。

しかし無名氏も Arnim も満足しようとしなかったのでBA 48号に A. Müller の論文「Ps. Zum Schluß über C. J. Kraus」をのせ、その後BA 52号にKは「訂正」として無名氏〔J. G. Hoffmann?〕の論文を取上げてこの論争に終末をつけさせる。

V. Kraus 論争の末期頃にBAの状態が悪くなったようである。発行者の Hitzig が Fouqué に1810年11月27日に手紙を出している。即ち「私は一年以内に破産です、もし私が私の趣味に従い続けるなら……夕刊紙によって、最初のすばらしい予想にも拘らず、非常に厳しい損失に苦しんでおります」(L432)とあり、Nordische Miscellen (1810. 12. 13) も Berlin 12月6日発として、「当地でしばらく前から出ていた夕刊紙〔BA〕は最初喜ばれた興味が

非常に薄れていくように見えます。その理由は年末にはもう発行されないという噂だからです」(L433) とある。

Ⅶ 気むずかしい仲間

1810年10月 C. v. Ompteda と「Kとの文学的交際も結ばれた。10月初旬以来BAが出ていた……その最初の号にすぐ孤独の病人(Ompteda)はその書き方や内容によって A. Müller の書いたものと認められる記事を見つけました。このことはすでに一年前彼の弟〔Ludwig v. Ompteda〕が彼に Müller を同じ意見の友と言っていたので、彼を説いて彼の側でもその〔愛国的〕政治的傾向が気に入っていたこの夕刊の編集部に寄稿を送るよう決心させました」(L434 a)。そして10月11日頃 C. v. Ompteda から送られてきた「Fragmente eines Zuschauers」を Kleist はBA21号に「Fragmente aus den Papieren eines Zuschauers am Tage」という題名でのせた、これは英国に関するものである。「この寄稿者〔兄 Ompteda〕が10月の終り頃〔22日〕にKが出版者であることを知った時、色々の種類の記事に関してKと活発な文通が交わされました」(L434 a)。

そして更にBA29号に匿名で兄 Ompteda の論文がのせられ、更にBA31号にものせられる。こうした時期のあとにBA44号にK〔?〕の論文「Über die gegenwärtige Lage von Großbritannien」がのった。それに対して匿名投稿の Ompteda の「Über die neueste Lage von Großbritannien」なる論文が検閲で不許可になった。それでKはBA48号に「公示」として、「ここで研究するのに余りに迂遠な顧慮されることのできない論文『Über die neueste……』の著者に我々は全く夕刊紙の発行所 (Jägerstraße, Kralowsky 宅) の中で著者宛書簡を受取られるよう謹んで懇願しております。その書簡は著者に Pettschaft mit einem Sokrateskopf の呈示で引渡されるでしょう。(編集部)」をのせ、その中にある手紙を次のように書く。

「閣下の論文『Über die neueste……』を小生は閣下に、印刷し、検閲によって削除されたものを送り返します。この2ヶ所の削除は小生には2つの剣が我々の忠実で貴重な利害と十文字に交差させられているように思えます。閣下にその中でこの全くすばらしい論文を読み、特にその栄誉な結末が小生や小生の部下たち(というのはそれについて多くの写しが拡っている)を感激させた凱旋式を祝う喜びや感激の状態を描写することは無駄ではないでしょう。そして小生が閣下に全く心から、小生が感ずる閣下を尊敬と友情の気持を口頭で申上げる機会をお作り下さることをお願いして筆を置きます。

追伸 印刷全紙は、それが校正に来る前に検閲にいけます——この検閲全紙を使う印刷者の名前で、小生はそれを謹んで小生にお返し下さるようお願い致します」(B178)。

これに対して Ompteda は11月28日に K宛書簡 (B178 b) を出す。そして弟 Ompteda が「11月末に Oberlausitz の友人や親戚の数ヶ月にわたる訪問から帰ってきて Berlin に数ヶ月滞在していた……ので、個人的には知っていたKを兄に思いきって近づけること」(L434 a) にし、翌29日に最初の会見が行われ、ここからKと兄 Ompteda との口頭での交際も始ったのである。しかしBA53/54号に Ompteda のBA29号にのった論文に対する無名氏の批判的論評「Bemerkungen über das erste Fragmente eines Zuschauers am Tage」がのった。これには「w.」という署名があった。それでこの「w.」という署名を Müller と

考えた Ompteda の心に感傷や邪推が起こり、Kは翌12月2日に早速 Ompteda に否定の手紙 (B179) を書かざるを得なかった。

こうして弟 Ompteda も語っているように「2. 3の寄稿を受取るとか受取らぬとかいう小さな軋轢は」(L434 a) 弟 Ompteda の努力によって解決されてはいた。「しかし不幸な病気が彼〔兄 Ompteda〕をおかした疑いのまま、Kが意図的に、墮落した相隣関係の中の Georg IIIの生涯の逸話を書いたという疑惑を作った時、再び怒りが生じたのだった」(L434 a)。

その後兄 Ompteda の投稿は更に続き、BA61号に「Anekdote : Schauspieler Edwin」、BA62号に「Autorität und Würde des Parlaments in England」、BA68号に「Anekdote: Wellesley」、BA75号に「Erinnerungen aus der Krankheitsgeschichte des König von England」と戦り、2人の関係は暫く1811年1月まで続いた。しかしそれからこうした場合にふさわしい方法で暗々裏に解消していった。それを1811年1月24日の兄 Ompteda の弟宛の手紙 (L463) は感じさせる。

VII 劇 場 騷 擾

BA12号の Miscellen に「非常に尊敬されている当地の女優 [Auguste Schmalz] は人々に噂されるように全くそのために劇場を去るはずであります。この件についてのくわしいことは次号に」と出た。これは女流歌手 Herbst と Schmalz との確執を伝えるものでBA14号に Schlegel の翻訳「十二夜」(Was ihr wollt) のIV/2の一場面で、捕われの執事 Molvolio に牧師サー Matthias に変装した道化師が質問する一節が「Shakespeare の執事の審問の断篇」として載せられている、即ち「副牧師のサー・マディアス：野禽に関してピタゴラスはどういうことを言いました？……/その説をお前は どう思います？」(坪内訳) と。

この Shakespeare における Pythagoras の教え「人間の魂は鳥の体内に宿り、鳥は人間の中で隠れる」(坪内訳) にもじって、BA15号に、

「夜鳴鳥に (Schmalz 嬢が Camilla を歌った時)

小夜啼鳥、汝がどこに隠れるか言ってくれ、荒れ狂う秋 [Herbst] 風が

ざわめく時？——張りのある声 [Schmalz] の喉の中で私は冬ごもりいたします。」

という短嘲詩がのせられる。(これはその後「Zeitung für d. eleg. Welt」に再録された。) こうした事情のもとにBA38号にKの「劇場ニュース」がのった。

「Wien, Stuttgart, München, Frankfurt など盛んに殆んど常軌を逸したほどの喝采を受けて上演された楽長 Weigl 氏のミュージカル〈門番一家〉は今当地の王立劇場でも下箱古されています。監督 [Iffland] はそれに対して強く感謝を受けるに値します。我々は軽快で快適な面でも立派なものが上演されるのを疑っていません。今 Emeline の役 (主役としてこの作品の全運命がかかっている) がどのように決められるか、その役が Schmalz 嬢に彼女の声の巾と確実さのために——役における習熟や老練さのために Müller 夫人に、或いは幸い二つを合せ持っているために Eunicke 夫人に (それが一番目的に適っているだろうが) 与えられるかどうか未定であります。Wien ではその役は堪能で音楽においても演劇上の技術の面でもすぐれた女優の一人 Milder 嬢に与えられており、彼女はその際にドイツを魅了しつづけております」と。

Berlin で当時 Iffland に対抗する同盟を結んだ一派があった。そのことは「Journal des

Lupus und der Moden」が1811年1月にくわしく伝えているが(L436c)、その一派は作品がそれほど立派でないで、おそらく上演を Iffland に頼んだ場合、草稿を突返される文士達だったが、彼らは Iffland に反対するためにとにかく一致していたのだった。

そうした事情の時、多くの劇場で喝采を博した「Schweizerfamilie」が Berlin でも上演されることになり、十分な配役が行われたのだった。ところが人々が考えるよりも長く、かけ声だけで上演されずにいたので、人々は Iffland が Emeline を演ずる 管の女優と二人で長い間もたもたさせているのだと言ったりしていた。即ちこの劇は主演の女優次第で成功し、うまくいくとみられていたのだった。しかし同盟を結んだ一派の人々はそうした考えを無視しようとしていた。そこでその解決策として前記のKの「劇場ニュース」が出されたのだった。しかしKの記事に Iffland は沈黙を守ったまま返事をしなかったが、Spener 新聞(1810.11.17)がそれをうけて「覚え書」として答えた。

「夕刊紙38号にデビューした未知の楽長 Weigl 氏のオペレッタ〈門番一家〉の友に我々はここに Emeline の役は Schmalz 嬢にも、Müller 夫人にも、その役に勿論素晴らしい適しているようにみえた Eunicke 夫人にも振りあてられないで、その役は Herbst 嬢にまわされましたとお知らせします」(L436a)。

こうして「Die Schweizerfamilie」は上演され「Herbst 嬢は歌でも所作でも期待以上」(L436c)だった。そのことは F. Schulz が BA49号の「Theater」で少々べている。しかしその上演の日、上演がすんだあと、「二、三のどンドン叩く人が立上り、しかも他の観衆もそれにならいました、そして Herbst 嬢が幕前に呼びだされました。警察の規則で劇場でのどンドン叩くのは本当に禁止されていまして、警官がどンドン叩く男を一人捕縛しました、そのことはそれでよかったですでしょうが、しかし警官は女優 Herbst に謝罪させるためにその若者を舞台上に連れていくという下手なミスをしました……捕縛された若者は青年貴族や将校の注目する中で不当に扱われたので、もともとある程度弁護士を雇える家庭の男でしたので、それで〈門番一家〉が11月26日再び上演されることになったので、Herbst 嬢に対する強力な徒党がつくられました」(L436c)。

こうして11月26日の上演には、「前奏曲のあと第一幕が静かに開かれましたが、Herbst 嬢が登場すると、さあ始めろ！とどなり声があがり、拍手したり、口笛を吹いたり、足を踏みならしたりされました。女優は退場し、舞台はやりなおしとなりましたが、しかし彼女が一声歌ったら、野次がアンコールと叫びました、さあ皆が笑いだしてしまって、女優は中止せざるを得ず幕がおりました。守衛や警官はこの間全く活躍しませんでした」(L436c)。

こうした結果 BA50号にKも「Theater」と題してそれを報じている。

「昨日〈門番一家〉が楽長 Weigl によって再演されました。激しいかなり全体的な拍手が、しかし歌い終ろうとするす前にアンコールと呼ばれた事情によって二重の意味にとれた Herbst 嬢の登場の際に——幕を下ろすのを必要とした、Berger 氏が幕前にでて他の作品が上演されると説明した。さて観衆を(もし大衆の一部をそう呼ばざるを得ないとすれば)作品が不愉快にするのかどうか、Emeline の役が全く不適當と思えなかった Herbst 嬢に不満であったかどうか——我々はそのまましておく。音楽の快適さは聞くところによれば、最初の上演の際、かなり普通に受取られた、そして Herbst 嬢もその役柄を彼女の音楽的演劇的才能の条件によって期待された以上に器用にやりとげました。更に観客は Goethe の die Geschwister とオペレッタ der Schatzgräber の二つの作品の上演によって充分慣れた。前者では Schönfeld 嬢が本当に立派な出来で、後者では Gern 氏がいつものように名人芸を

みせた。

こうしてこの上演の騒ぎの結果「Iffland 氏が失脚することはありそうです。彼の劇場での第一声は、どンドン叩く奴らは彼女を釘づけするだろうが、私を釘づけにはしない、でした。そして真面目くさって彼は次の日退職を求めたのです」(L436c)。

しかし全体的にみてKはこの事件の報道の中で明らかに事件そのものとは直接交渉を持ちたがらず、彼の名は全然表面に出ていない。